

Semantics of Meaning as Invariant Specified  
among Ambient Semiotic Array\n: A Methodology  
of Ecological Linguistics

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-01-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇都宮, 裕章 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00027826">https://doi.org/10.14945/00027826</a>

# 包囲記号配列の中で特定される不変項としての〈意味〉

## —生態言語学的分析方法の提案—

Semantics of Meaning as Invariant Specified among Ambient Semiotic Array

: A Methodology of Ecological Linguistics

宇都宮 裕章<sup>1</sup>

Hiroaki UTSUNOMIYA

(令和2年11月30日受理)

### ABSTRACT

The main topic of this paper is the validity of ecological linguistics. If the direct perception theory is valid, the mechanism for understanding and expressing the meaning could not be described as the system of stimulus and responses. Not only that, this theory is suggested that the degree of credibility of the research to be demonstrated in the brain (internal central processing) or in the society (external environment) becomes low. In order for us to learn a language (or its ability), we need not to know the physical aspects (characteristics, functions, etc.) of the language in advance. Based on these ideas, we will consider the direction of new fields pioneering by borrowing the knowledge of ecological science that enables advanced and interdisciplinary discussions, developed by Gibson in his later years.

### 1. はじめに

本稿での議論は、「意味」を生態言語学の観点から分析することの妥当性である。

概ね生態学においては直接知覚説が支持されているが、この説に準拠していくと、意味を理解・表現する仕組み、特にその代表格である言語についての「語彙や音韻や文字や文などという刺激物が目や耳を通して入力され脳内で処理されることによって私たちにその意味が分かる」という極めて古典的・常識的な捉え方に疑義が生じてくる。それだけではなく、意味自体が言語（表現）の中にあると前提しその意味を記述していく研究群、あるいは、言語表現の適切性（意味が正しく理解されるかどうか等）を決定する機構や規則が脳内（内部中枢）にもしくは社会（外部環境）に存在することを立証しようとする研究群に対しても、再考を要することが示唆される。さらには、私たちが言語（能力）を習得・学習するには予め言語に備わる物理的特性（性質や機能等）を知らなくてはならないとする学習観・言語観への問い直しが必要であることにも繋がっていく。もっとも、そうした結論に至るまでには数々の議論を重ねなければならないが、少なくとも関連する議論を行うことのできる領野がなかったことだけは確かであ

---

<sup>1</sup> 国語教育系列

る。そこで本稿では、生態学の議論のなかでも先進的かつ学際的な議論を可能とする生態科学、特に J.J.ギブソンが晩年展開した視覚論の知見を借りながら、現在も開拓が進む新分野の方向性も合わせて考えていくことにする。

## 2. 直接知覚説

私たちは、感覚刺激が同じ（はず）なのに異なった現象のようにものを見ることがある。たとえば、左右や上下に離れた二つの位置にある電球を順番に点滅させると、その点滅が早くなるにつれて光の「点滅」ではなく「移動」が見えてくる（ファイ現象）。あるいは、錯視図形や多義図形のように、科学的に測定すると明らかに同じ長さ、同じ色、同じ姿であるにもかかわらず、一方が他方より長く見えたり、異なった色味が見えたり、「アヒル」が「ウサギ」に見えたりすることがある（図 1）。反対に、感覚刺激は異なっている（はずな）のに同じ現象だと捉えることもある。たとえば、近くにある電柱と遠くにある電柱が同じ「高さ」に見えたり、手に取った文庫本をどのように矯めつ眇めつしようが同じ「形」の文庫本に見えたりする。こう

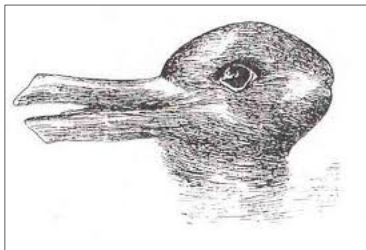


図 1:多義図形

した現象は視覚に限らず、聴覚・嗅覚・味覚・触覚のいわゆる五感と言われているもの全般に観察される。

今でこそ当たり前になっているが、ギブソンが生態学的アプローチを採用し始めたきっかけこそが、当時謎に包まれていた上の（ゲシュタルト）知覚現象であった。それまでの伝統的知覚論の多くは、感覚刺激と知覚との関係について「特定の知覚が生じるのは常に（恒常的な）特定の感覚刺激が原因となっている」と説明していた。これが「恒常性仮説」な

のであるが、当然この仮説では上の現象が説明できない。特定の刺激が入力になっていても常に同じ知覚が発生するわけではなく、また逆に、一定の刺激が特定できなくても常に同じような知覚が発生することがあるためである。

しかしながら、この仮説自体は現在でも姿を変えて生き残っていて、未だに仮説の域を出ていない。というのは、外からの「刺激」を受容した「入力」感覚器がその刺激を何らかの信号に変換し、変換された信号が脳などの「中枢」機構に届き、中枢機構がそれを処理することによって特定の知覚になる、という一連のプロセスを完全に否定することができないためである。つまり、刺激と知覚のずれは恒常的な刺激が変換を経ることで発生している事象であると考えることが可能な限り、恒常性の存在自体は却下されない。これが一般的に「間接知覚説」として定着している。

それでも、「刺激」と「入力」と「中枢」の3項で知覚全般を説明するには、かなり高いハードルがある。まずは、環境中にある刺激のうち入力可能なものは何かを特定しなくてはならない（さもなくば外部のあらゆるものが刺激と言えてしまう）。特定できたとしても、それがどう入力され、どう処理されるのか、その処理の結果どのような知覚となるのか、という刺激伝達の道筋を明示する必要がある（さもなくば3項が連携しなくても互いに独立して機能することを認めることになる）。さらには、それぞれの項が発現する条件、つまりは刺激・入力・中枢の存在条件（刺激の性質・入力物の取捨選択法やタイミングを決める仕組み・伝達されるものの中身と知覚への変換機構等）を解明しなくてはならない（さもなくば3項の存在が検証できない）。最後に、3項を使った説明で一番厄介なのが「知覚とは何か」の規定であり、定義さえも

一貫させることが難しいことである。仮に、それが中枢機構の施す解釈のことだとしても、刺激や入力との関係性を明らかにしない限り、「なぜ知覚というものに進化したのか（なぜ刺激をそのまま取り込まずわざわざ解釈し直すという回りくどい機構が淘汰されてきたのか）」という問いへの回答や、知覚と解釈を分断する必然性とは何かを理論づけることができないだろう。

一方、ギブソンが解明を目指した仮説は、「環境を知覚することとは環境がアフォードするもの<sup>1)</sup>を知覚することである」という「直接知覚説」である。

これは大変大胆な仮説である。なぜならば、環境に存在する事物の「価値」や「意味」が直接的に知覚されることを示しているからである。さらにこの仮説は、価値や意味が知覚者の外側に存在するということがどのような意味をもっているのかを説明することになる。 (ギブソン, 1985, p.137)

彼はこのように述べているが、それはつまり直接知覚説が、3項を必要とする間接知覚説に対峙する理論であると同時に、間接知覚説が抱え込んでいる前述の障害を解消する理論であることも示唆する。第一に、有機体（生命体）<sup>2)</sup>が環境に接しているという事実をもって知覚とする（いわば有機体と環境の2項で説明する）ので、入力に適するような取捨選択すべき刺激物を想定する必要がない。第二に、刺激に相当するものがどのように中枢に伝達されるかの道筋を示す必要もない。そして第三に、受容器なり中枢機構なりの働きを解明する必要もなくなる。むしろ、直接知覚説は3項の存在自体を否定する理論ではない。重要な点は、3項に訴えなくても知覚とは何かを解明できる理論だということであり、人間以外の有機体の知覚までも説明可能な、つまり有機体の本質に迫ることができる理論なのである。したがって、進化論的に言っても知覚の必要性を示すことができるので、当然その仕組みが生き残ってきた理由も明らかにできる。

もともと、この仮説に拠ったからといって問題がすべて解消されるというものではなく、むしろ新しい難問の出来を招いた理論だとも言える。

たとえば、光の点滅に代表される冒頭のファイ現象であるが、直接知覚説ではこれを「光の点滅は移動をアフォードする（光の移動というアフォーダンスを知覚する）」と説明する。以下同様に、「当該図形は異なった長さ・色味・形等をアフォードする」「文庫本のようなモノ（＝遊離対象）はどのような向きにしてもあるいはどこから見ても（可逆性がある限り）同一のモノであることをアフォードする」等と説明することを可能にしている。繰り返すが、こうした説明法に刺激や入力や中枢を仮定する必要はない。しかしながら、今度はアフォードするもの、すなわち「アフォーダンス」とは何かを解明しなくてはならなくなる。それを知覚することが知覚そのものなのであるから、アフォーダンスが解明できれば知覚自体の解明が完了することになるのだが、これが直接知覚説の最大の難問として立ちはだかっている。

ここでギブソンは、アフォーダンスそのものを明らかにする手がかりとして「アフォーダンスを特定する情報が環境の中にあるのかもしれない」と考えた。現代風にたとえるならば、「スマホの位置がウェブ地図上に表示されればそこにスマホのあることが分かる」という発想である。そして長い時間（生涯）をかけ、視覚という知覚においては「アフォーダンスを形作る環境の基本的特性が包囲光配列という構造の中に特定されている（ゆえにアフォーダンスとは包囲光の中で特定された不変項のことである）」ことを立証してみせたのである。不変項に相当す

るものすべてがアフォーダンスだとは明言していないが、少なくともその最有力候補であることが示されたため、アフォーダンスそのものの解明に一步近づくことができたのである。

しかしながら、その後の研究史を概観してみても「アフォーダンス」という用語の定義には困難を極め、必然的に当該術語は多義にならざるを得なかった（宇都宮, 2020）。現時点においても不変項とアフォーダンスを完全に等価と結論づけた論考はなく、アフォーダンス解明への営みが続いている。そこで、本稿でも以降「不変項」という呼び方に限定していきたい。

### 3. 包囲する配列と不変項

不変項とは、ギブソン流に語るならば、包囲光の中で特定される安定した情報ということになる。ある有機体にとっても、容易に抽出可能な情報でありかつそれを抽出することが視覚となる。

その包囲光であるが、図2の右側の図が示す通り（また文字通りの）何かを取り囲んでいる光のことである。一見、左側の図と矢印の向きを逆にしただけのような印象であるが、左図で

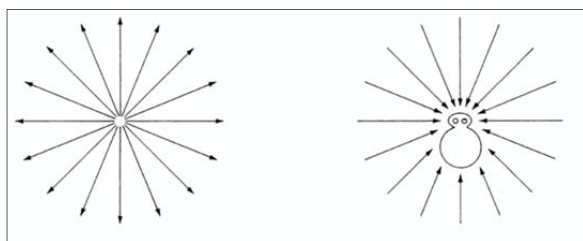


図2:包囲光配列（ギブソン, 1985, 図 4.2）

は矢印で示された光を眼が受容すべき「刺激」としているのに対し、右図では矢印を「情報」だとしている点が違う。精確には、矢印の向きや形の全体像、すなわち配列自体が視覚の情報である。

図のように、静止しているものの包囲光配列を表示するのは比較的簡単で、それゆえに配列（特にその中の特定情報＝不

変項）が容易に知覚され、「それが何か」が分かる。すなわち見ることができる。先ほどの右図に描かれているものが人（雪だるま？）だと瞬時に判断できるのも、包囲光配列が知覚されているからなのである。ただし、ここで考察を終わりにしてしまうと、配列が静止していないものが見えないなどというおかしな推論を導いてしまう。ギブソン論考の卓越しているところは、包囲光配列を受容・入力することが見ることなのではなく、包囲光配列の中に特定可能な情報＝不変項を抽出することが見ることだと規定した点なのである。

逆説的な言い方になるが、変化をしている事象の中でさえ不変項は抽出可能である。むしろ、環境は（世界は）常時動いているのであるから、万一動きの中での不変項を有機体が抽出（利用）できなければ、その有機体は環境の中で生き残ることが非常に困難になる。視覚に限って言っても、静止しないものが見えないという事態は、その有機体にとって相当のハンディを背負うことになるだろう。ものを見るということは、環境そのものを知覚するというのである。そして当の有機体は、包囲光に満たされた、無限の情報に満ち溢れた環境から、特定の情報＝不変項を抽出することで生きている。

そこで重要になる捉え方が、「変化の中の不変項」というものである。これは、恒常的な情報が環境の中に実存するというのではない。さらに、ある特定された（予め固定化した）情報（たとえば性質）がモノの中に存在するというだけでもなく、ましてその性質等を有機体が入力しているということでもない。少なくとも、不変項を獲得することが見るということなのではない。万一獲得しなければ見えないということになれば、不変項は明らかに・いつでも・どこでも静止物として存在していなければならぬだろう。ところが、不変項は環境という動

的なものの中から生まれる。発生しては消えるというものの中にある。常時変化を遂げているものの中にこそ存在している。

実は、それを実証するのは難しいことではない（理論化するのは困難を極めるが）。前述した文庫本をもう一度取り上げてみよう。文庫本を手にとって持ち上げてみたり、傾けたり、回したりしても、「常に同じ」文庫本だと私たちは知覚する。見えているはずの形は、ある時は長方形に、ある時は台形に変化しているが、相変わらず同じ形態を成す文庫本である。次に、その文庫本を机の上に置いたまま、上から、横から、斜めから、とにかく自分自身の見る位置を変えて眺めてみる。それでも、同じ形をしている。最後に、回転椅子のようなものに座ったまま文庫本を読む姿勢になり、その姿勢を維持したままくりと椅子を（下半身を利用して）回してみる。すると、何だか周りの風景は流動的にぐるぐる動いているが、やはり文庫本は文庫本のまま変わらない。よって、対象が、自分が、環境がどう動こうと、どう変わろうと（すなわち包囲光配列がどのようになろうとも）、不変的なものが存在していることが分かる。ここでは「文庫本」がそれに相当する。最低限「文庫本だという知覚」は変わっておらず、それを私たちは「文庫本を見た」と表現するのである。

しかし、重ねて留意しておかなくてはならないことは、抽出が可能だからといって不変項自体が物理的に存在している（＝実存している）のではないという点である。当初ギブソンは（有機体に今見えている）環境そのものを「媒質」と「物質」と「面」に区分して、この3つから構成されるものを環境としていたが、包囲光のアイデアを得た後は「面」が「包囲光配列」であることをつきとめ、その配列如何によって見え方が変わることを確かめていった。濃い霧という媒質だけに包まれた世界も、徐々に霧が晴れることで物質が見えてくる。これは、世界に「媒質の存在」だけを見るか「物質の存在」も見るかという知覚の仕方にも関わってくる問題である。当然のことながらギブソンの理論を、有機体があたかも魔法のように何かを眺めるだけで物質を発生させることができるなどという理屈に解釈することはできないし、現実にもありえない。あくまでも、それが知覚なのだという主張である。だからこそ、不変項が物質（あるいは物質に備わる性質）や媒質（あるいは媒質に備わる性質）だとしてしまうと深刻な循環論を生んでしまうのだが、残念ながら現在でもそれに近い立場を取る研究理論がある。確かに、見えれば「ある」ように感じるのは人間の特性なのかもしれないが、哲学的な議論を経なくても当該の立場は明らかに極端な主知主義であることが知れよう。

それでもギブソンは不変項の存在を疑ってはいなかったし、ギブソンに続く生態学者も実際に不変項を抽出しようとして研究を重ねている。特に生態心理学の分野では、それを様々な数式等を駆使して記述することに成功している（佐々木・三嶋, 2001）。よって、本当に実存するかどうかは別としても、存在を前提として話を進めることは可能であり、それが今や「環境には不変項がある」という一定の了解に至っているのである。

繰り返すが、包囲光配列の中に不変的な情報＝不変項があり、それを抽出することができるために私たちはものを見ること＝知覚ができる、というのが視覚における直接知覚説である。視覚の不変項が包囲光配列の中から抽出可能ということになれば、視覚以外の知覚、前節でも言及した聴覚・嗅覚・味覚・触覚の知覚における配列構造を示し、それらを分析することで不変項を解き明かすことができる可能性が高くなる。「包囲音」「包囲臭」「包囲味」「包囲感」（以上は本稿での暫定的な術語としておく）とでも呼べる配列構造がどのようなものか、その詳細は生態科学本体の分析に譲ることにして、本稿では、知覚には包囲する配列が欠かせないと考

え、配列構造の存在あるいはその変容が不変項を発生させ、それを有機体が抽出することで知覚が発現する、ひいては「意味」を理解することに繋がるという言語論へと展開する。というのも、ギブソンのアフォーダンス理論が暗示しているのは、「〈環境がアフォードするもの〉 = 〈アフォーダンス (たとえば不変項)〉 = 〈価値や意味〉は直接理解ができる」ということに他ならないからである。本節では、これ以上の不変項についての存在論的議論は控えるが、その立証を試行する代わりに不変項に相当するのは何か (何であるべきか) を次に論じていこう。

#### 4. 意味と不変項の等価性

まずは、視覚という知覚の再確認をする。視覚の在り方、すなわち見え方が包囲光配列の在り方によって変わる。それは、先ほどの文庫本についての考察が示す通りである。モノが動いても、自分が動いても、両者を取り囲む環境が動いても、包囲光配列は変化をする。変化をするのだが、その中で変わらないものもある。それが不変項である。私たちは、不変項を抽出することでそれが何であるかを知る。以上が視覚の概要である。

聴覚の在り方も、包囲音配列の在り方によって変わる。スピーカーを動かしても、それに近づいても遠ざかっても、音楽室全体が揺れていても、聞こえてくる音楽が何であるかは分かる。これが聴覚である。

あるいは嗅覚はどうだろう。ハイキング中にどこからともなく漂ってくる匂い、その正体を探ろうと近づいてみると、梅の木だったというようなことはないだろうか。その梅の木を取り囲む匂いの配列は、確かにその時々で変化をしていたのだが、梅の木だと了解すればどこに立とうが梅の香りがするのである。

味覚と触覚についても、類似する実例を挙げるのは難しくない。いずれにしても重要なのは、不変項の抽出 (特定) に当たっては、包囲する配列が関与している、それも目まぐるしく変化をしているにもかかわらず、抽出を可能にするものとして現存していることである。現存という述べ方が極端なのであれば、実際の配列が、そして、それらが関与する不変項が「見える」「聞こえる」「匂う」「味わえる」「触れられる」と言うべきだろうか。総じて、知覚されている。本稿ではそれら包囲する配列を単純に「包囲配列 (ambient array)」と呼ぶことにする。「環境配列 (environmental array)」と名付けてもよいかもしれない。ともかくも前述したように、包囲配列の中でも包囲光配列を描くのは難しくない。しかし、環境中のありとあらゆる包囲配列の全体像を一度に示す、ましてや描き切ることには不可能に近いだろう。だから、有機体は環境中の包囲配列の一部分を切り取って抽出し、それを理解する機構を「知覚」として進化させたのだと考えられよう。

さて、もし知覚が上述のようだとするならば、あらゆる事象の理解と表現に寄与する言語も、有機体が (特に人間が) 進化させた知覚系であるということは言えないだろうか。確かに、言語の包囲配列がどのようなものかは、現時点では定かではない。しかしながら、環境が変わると意味が変わるという様相は、これまで述べてきた知覚の在り方に極めて類似するものである。

- (1) a. リンゴ
- b. ミカン

あまりにもありきたりな例であるが、(1a)と(1b)では意味が違う。視覚の観点から述べると対

象を入れ替えることに相当する。リンゴとミカンでは見え方が異なる。それは、リンゴをめぐる包囲光配列とミカンをめぐる包囲光配列が異なっているからである（実際にも色や形や大きさといった肌理＝包囲光配列が相当異なっている）。さらに、抽出できる不変項も異なる（包囲光配列が違うのだから当然と言えば当然なのであるが）。繰り返すが、言語に関しての包囲配列がどのような形をしているのか、あるいはどのように存在しているのかは現段階では不明である。

- (2) a.リンゴを食べる  
b.リンゴを剥く

(2)は、対象に加工を施した（あるいは名詞に動詞を付け足した）例である。確かに、意味が違う。文庫本の上に鉛筆を置くのと消しゴムを置くのとで、包囲光配列に変化が生じる事例に似ている。しかも、「リンゴ」自体の意味も違っている。(2a)の「リンゴ」はリンゴ全体が食べる対象であるが、(2b)の「リンゴ」はその一部（つまり皮）だけが剥く対象になっている。おそらく、リンゴの包囲配列から抽出できる不変項が異なっているためだ。

- (3) a.ぽかぽか陽気  
b.ぽかぽか殴る

両者の「ぽかぽか」は、形（表記）は同じであるが意味が違う。(3a)は暖気の程度、(3b)は力の程度（あるいは行動の様子）である。これらも、「ぽかぽか」という表現をめぐる包囲配列の変化、そしてそこから抽出可能な不変項の違いとして説明できるだろう。ここでもすべての包囲配列を示すことはできないが、たとえば包囲音配列として(3a)には「低高高高」、(3b)には「高低低低」という（東京）アクセントが観察される。

以上の分析方法は、従来的一般言語学においても基本中の基本とされる。その分析の結果何が分かるかということ、語彙にはそれぞれ固有の意味があること(1)、動詞の対象（項）は動詞の種類によって解釈が異なること(2)、「ぽかぽか」には2つの意味があること(3)、等である。しかし、これだけで本当に意味が解明できたと言えるのだろうか。もしかすると、意味を解明したと言いつつ単に「そのように解釈可能だ」と記述しているだけなのではないだろうか。そして、「そのように解釈できる理由はそのように使用しているからだ（そのような文脈で現れているからだ）」などと蛇足的な循環論に陥ってはいないだろうか。(3)の例を通して述べると、「ぽかぽか」には2つの意味がある、それは後接する語彙が「陽気」か「殴る」かで意味が変わることで証明できる、なぜ後接する語彙によって意味が変わるのかと言えば、「ぽかぽか」に2つの意味があるからだと分析しているのに等しい。

- (4) ぽかぽか

ここで、「ぽかぽか」という語彙を単体で示してみる。その上で、春のうららかな景色とボクシング場でのシーンを解釈者（以降言語学的術語を用いて「主体」と呼ぶ）に思い浮かべてもらう。すると、それだけで「ぽかぽか」の意味が変わることが分かる。これは、言語の意味と



いうものが外部の（目に見える）文字表記や語彙と呼ばれるものの中だけに存在するのではないことを示している。ところが、一般言語学ではこの事象に対し、主体が自ら解釈を変えている（思い浮かべるものが違う）のだから、意味が変わるのは当然のことだとして、意味分析上ではやってはいけない禁じ手としている。なぜなら、それをすると、言語の意味を自在に操れる神のような主体を認めることになってしまうからである（先ほどの極端な主知主義に匹敵する）。

しかしながら、主体の想起に頼らなくても、いわゆる文脈を変えると意味が変わる現象は無限に観察できる。実は、そうした議論を軸にした領域が「語用論」なのである。

(5) 今日ばばかばかだねー。

(5)の発言は、(春の)川辺で発するか(ボクシング)会場で発するかによって意味が変わる。これが、文脈が意味を決定するプロセスである。その後は、その条件を詳細に記述して、決定プロセスの謎を解明するという手続きを経る。

ただ、語用論的分析を施してみても、表現単体に意味が備わっているという常識の足枷から逃れることは非常に難しい。たとえば、(音韻論的な)言い方を変えるだけでも意味が変わるのはなぜなのかを文脈の観点から説明するのは、純粋な語用論の領域を越えている。

(6) これは何ですか。

(6)を八百屋の店先で使えば、もしかすると珍しい野菜の名前を客が尋ねている「質問」になるかもしれない。ところが、同じ店先で客が語気を強めて店主に詰め寄っているとすると、あまりに古く萎びた野菜を知らずに買わされて「文句」を言っているのではないかという解釈もできる。(6)の意味が「質問」になるのか「文句」になるのかは、主に文脈が決めているのかもしれないが、音の強弱やアクセントの違いが影響していないとは言い切れない。店主側からすれば、客の表現方法によっては、その意図が「質問」にあるのか「文句」にあるのか迷う場合もあるだろう。あるいは、(6)を誰が発しているかによっても意味は変化しうる。それに、(6)の文頭に「一体」を入れるか入れないかによっても意味が変わるという事実は、上述した(2)や(3)の事例に匹敵していて、文構造の面も加味しないと意味決定ができないということになってしまう。

少し脇道にそれるが、語用論が得意とする分析対象に文の「容認性」がある。

(7) a.リンゴを食べる  
b.?リンゴを走る

(7b)は、(日本語の)文構造上では、間違った表現だと規定することができない(それを言う(7a)がなぜ正当なのかを立証しなくてはならなくなる)。一方、語用論的分析にかければ、(ここではいささか単純すぎる説明であるが) (7b)が不自然なのは「リンゴは場所としての使い方ができないためである」という回答が出せる。もっとも、文法論(あるいは統語論)的に分析することは不可能ではなく、たとえば「走る」は「場所」をその項として取るという構造を持

つ（だから「場所」ではない「ミカン」も「鉛筆」も「走る」の項にはならない）とまでは言えるだろう。それでも、繰り返しになるが、この分析は限りなく循環論に近い。仮に「リンゴ」が場所になってしまったら、「場所を項とする」という言い方自体が不適切になる。ここでの「場所」というのは意味なのだから、意味を用いて容認性を解説していることになるからである。本来、「リンゴ」が場所かどうかを決定するのは文構造ではない。それは、「公園」や「グラウンド」が場所かどうかを決めるのが文構造ではないということと同値である。いくら「場所が動詞（走る）の項になる」と言っても、(7b)の不自然さの根拠がそれだとは言えない。「場所を項とする」という理論は、「公園を項とする」「グラウンドを項とする」といった記述とまったく変わらないのである。その証拠に下の(8a)の例は、「山」を「場所」（たとえば山野）として解釈するか「モノ（対象）」（たとえばリンゴの山）として解釈するかで容認される度合いが違ってくる。「山が場所になる時に限って動詞の項になる」という理屈は、理論ではなく単なる記述にすぎない。

- (8) a.山を走る  
b.リンゴを走る

加えて、(8b)（再掲）でさえ、もしリンゴを這う蟻の立場からすれば、不可能な言い方ではなくなる。なぜそうなのかについては、従来の考え方を柔軟に適用したところで、リンゴの意味が変わったからと言うしかない。さらに、なぜリンゴの意味が変わる（変えられる）のかの回答は、もはや一般言語学からは出せない。言語学的分析全般において、意味の変容に関する分析には限界があるのである。特に、主体側の関わりに言及することができない。一般言語学では、「主体」と「言語」が厳格に二分されている。先ほども示唆したが、意味の変容の要因について主体を持ち出すと、いわゆる「何でもアリ」という状況が発生してしまい、言語分析そのものが破綻してしまうのである。そのため、どうしても言語を純粋な、理想的な存在として、二元論的に区別して、独立させて、主体とは関係のない存在として、取り扱わなければならない。ところが、言語にはやはり主体が欠かせない。言語を駆使している者、解釈している者が何を隠そう当の主体だからである。意味の問題に取り組み始めると、これが理論構築上の数々の論点先取的な議論となって跳ね返ってきてしまう。

一方、生態言語学では、主体（有機体）を巻き込みながら意味の変容を、そしてそれを「動的」に分析していく。さらには、その分析結果を知覚の問題に還元する。

上の(8b)の「リンゴ」について、これを「リンゴ」と名付けられた街道だとも考えて欲しい（実際にも北関東や長野県にそう呼ばれている道があるそうだ）。すると、自然な表現として容認可能になることが分かる（おそらく従来なら「リンゴ」が固有名詞化したために容認可能となったと説明するのだろうが、重ねてこれは循環論である）。確かに、ここで解釈を変えたのは主体であるが、主体が影響して見え方が変わるように感じられる現象は、すでに多義図形で確認済みである（後ほどまとめて見解を示すので、ここでの議論は保留にしておく）。

- (9) a.ローカを走る  
b.廊下を走る

(9a)を耳にすると私たちはたちまち(9b)だと知り、これをまったく自然な表現として受け入れる。しかし、実は、

(10) 老化を走る

と述べたのだと言われると、「何だそれ？」と尋ねたくなるだろう。容認性がなぜ逆転したのか。この短時間において何が起こったのか。これらも従来の言語学では分析ができない。「ローカ」と「老化」の表記の差か。あるいは音と文字との違いか。文脈が変化したためか。そのいずれもが正解でもあり間違いでもある。その理由は、容認性が、音韻や、語彙や、文法・構造や、文脈や、主体の知識・背景・認識や、その他諸々の事柄が複合的に関わっているからなのである。つまりは、言語に関する（本例では特に「ローカ」に関する）包囲配列の変化、および抽出可能な不変項の違いがあって発生する現象だからに他ならない。本例においても、視覚・聴覚両方の影響が否定できない。

(11) えこ・・・

誰かが(11)のように話し出した。この時点で「えこ」の意味を問うことは、殊に一般言語学上ではないだろう。しかし、生態言語学では、ここからすでに分析が始まっている。

(12) えこひいきについてのお話ですが・・・

残念ながら生態学の話ではなかったようである。ここまでの現象は、主体が家の玄関から入って部屋に移動する際の、主体が知覚する包囲光配列の変化（前から後ろに流れるように見える事象）に相当する。包囲光配列が変わるから見え方が変わるのと同じように、表現自体の推移は包囲配列の変化として主体に知覚される。

(13) えこひいきについてのお話ですが、今日はそのお時間がございません。

そうか、(12)の発言は講演の枕ではなくて締め言葉だったのか、講演会場にいない主体はこの時点でそう解釈するだろう。ところが、講演会に出席している者からすれば、そんなことは即刻承知で、締め言葉かどうかなどはどうでもよい事柄となる。つまり、立場が異なると発言自体の価値さえも異なってくるのである。

(14) えこつりずむについてのお話ですが・・・

さらに、もし(12)ではなく(14)のように続いていたとすると、講演の内容がたちまち教育問題から環境問題へと変異する。しかしながら「変異」と解釈するのは、おそらく本論文を読み進めている読者諸氏に限られるかもしれない。出席者は始めから講演のタイトルを知っている。よって、意味の「変異」とは解釈しない。

以上のように考察してみると、これまでの言語学で「言語現象」とみなされた表現・表記・

音韻等形自体の変化、見方・眺め方・捉え方等の変化、文脈・状況等の変化が、文庫本を持ち上げたり、置いたまま見る位置を変えたり、椅子を回して見たりする際の包囲光配列の変化と同じような現象であることが判明する。言語をめぐる変化に関与しているのが包囲「光」だけだとはけっして言えないが、視覚が包囲光配列の推移如何で変化していくのと同様、言語についての知覚も世界を包囲する何らかの配列の推移如何で変化を遂げていく。そして、視覚についての不変項が抽出できるのと同様、言語の知覚についても何らかの安定した情報、すなわち意味が抽出できる。確かに、意味自体の記述は難しく適切な表し方には工夫が必要であるが、それは視覚の不変項でも同じことである。それでも簡単にできる場合もあって、文字通り静的な不変項であれば、文庫本・リンゴ・ミカン・・・等々と特定ができる。明確に特定された時、私たちはそれらを「見た」「聞いた」「知った」「分かった」、つまりは知覚したと意識するのである。反対に、多義図形のようにあるいは多義語のように、揺れる不変項に接すると（不変項の抽出に揺れがあると）、どちらか特定できないという現象が発生する。さらには、包囲配列を感じているはずなのだけれど、不変項が曖昧な場合もあるだろう。霧の中から何かを探している状況は、ちょうど講演を聞きながら何の話だろうかと推測している状況に匹敵する。言語現象において容認性判断に著しい揺れあるいは個人差があるのも、ものを見ることにおいてそこに何を見出すかが人によって異なることと等価である。それもこれも、言語の理解が知覚の一種とみなすことができはじめて明らかになることであり、その解明を目指す分野こそが生態言語学なのである。

## 5. 生態言語学の目的と方法

知覚は、環境だけでは成立しない。有機体だけでも成立しない。だから、知覚が変わった原因をどちらか一方だけに求めることはできない。これが「環境を知覚することが知覚そのものである」とする直接知覚説の根幹である。確かに、冒頭が多義図形では「アヒル」と見るか「ウサギ」と見るかのコントロールが意図的に可能であるかのように感じる。しかしそれは、(4)の「ぼかぼか」や前節での「リンゴ」の例と同様であって、主体側が、主体だけが自在に操った結果ではないはずである。もしかすると、本拙論を読んで（説得されて？）、初めて「そのように見えた」「解釈できた」「納得した」者もいるかもしれない。むろん、それらの解釈を促しているのが中枢機構であるという仮説を破棄できない以上、間接知覚説の否定もできない（一般言語学の妥当性は間接知覚説によって保障されているとも言える）。

表1 関連分野における研究目的・方法論・検証法（宇都宮, 2018, p.93:表 3.3 を改編したもの）

	目的	方法論	検証法
一般言語学	$G_f$ の解明	$S_n$ ( $\doteq S_f$ ) から $G_f$ を推測	$G_f$ から $S_f$ ( $\doteq S_n$ ) を予測
生態言語学	$M_n$ の解明	$S_n \sim S_{n+1}$ の変化から $M_n$ を抽出	$S_n$ と $M_n$ の関連を説明

\*S (言語)、G (規範=文法)、M (意味)

\*添字の f は最終(時)点、n は任意(時)点、1 は(極小) 変異量

分析過程が類似したものである反面、分析結果やその意義が異なるのも、生態言語学が採用している方法論が従来型とは異なっているためなのである。中でも、「意味」の取り扱い方がまったく違う。それを宇都宮 (2018) では、上のような表を掲げて提示した（教育に関連するも

う一つの分野「心理言語学」については本稿での議論上省略する)。

一般言語学の最終目的は完全で理想的な言語 ( $S_f$ ) の規範 ( $G_f$ : 文法・言語のルール) の解明にある。一方、生態言語学の目的は、知覚としてのシステムが機能するある時点 ( $n$ ) での意味 ( $M_n$ ) の解明に絞られる。厳密に言うと、この表にもある通り生態言語学上の意味 ( $M$ ) に相当する事項は一般言語学には登場しない。概念自体が異なると言ってもよい (定義していない場合がほとんどであるが一般言語学的議論の大半が本表の  $G_f$  であることを仄かしている)。生態言語学では、意味を動的に発生するものとみなすために、その記述や説明を言語によって行う限り、どれほどの労力を費やしてもけっして固定物として明示することなどできないと考える。ここから、解明しようとする意味も  $n$  時点のものとして扱うしかなくなる。しかし、逆説的ではあるが、この  $M_n$ こそが当面の焦点である言語 ( $S_n$ ) とは何かを紐解く鍵になる。少なくとも、なぜ  $S_n$  になった (なっている) のか、どうしたら  $S_{n+1}$  になるのかを説明できる理論は  $G_f$  ではない。また、一般言語学では逐一のデータから雑音を取り除いた上で目的とする解明物を推測するため  $S_f$  (理想的データ) の存在が大前提となるが、生態言語学では生のデータの変化から  $M_n$  を抽出するため、原理的に  $S_f$  の存在を必要としない。実際にも、研究に資するデータは  $n$  時点 (もしくは  $n-1$  時点) にしか存在しないので、採取すればそれは必ず  $S_n$  になる。さらに、生態言語学では方法論 (理論構築の手続き) と検証法 (理論の妥当性の評価) が表に示す通り相補的な関係にならず、この点で循環論に陥る危険性を回避できる。意味の取り扱い方の違いを簡単に述べると、意味の確定 (をを目指す) が一般言語学で、意味の推定 (に留める) が生態言語学、ということになるだろう。

以上のような方法論からの考察を通していても、(言語の) 意味と (知覚の) 不変項との等価性が垣間見える。間接知覚説では懸案の 3 項について、 $S_f$  を (恒常的) 刺激、 $S_n$  を入力、 $G_f$  を中枢とすることで説明するが、直接知覚説では基本的に環境寄りの  $S$  と有機体寄りの  $M$  だけで説明をすることになる。ここでの  $S_n$  から  $S_{n+1}$  への移行は包囲配列の変化、 $M_n$  が不変項である。したがって、最狭義の生態言語学に取り組みとすれば、「いま・ここ」での意味を解明することが高く評価されなくてはならなくなるだろう。しかも、その評価に重要な意義がある。すなわち、「いま・ここ」での意味が解明できれば、次に発生するであろう意味も推定可能であり、ひいては言語が何であるか、何のために存在しているのか、言語環境とは・言語主体とは何か、が (文字通り) 「見えて」くるのではないかと考えられるのである。

たいへん興味深いことに、この捉え方はすでにアメリカの哲学者 C.S. パースが今から 150 年ほど前にも発表した記号過程論 (カテゴリー論) そのものである。その詳細は拙著 (宇都宮, 2018) で論考済みなので本稿での議論からは割愛するが、概略は下の表で示しておきたい。

記号過程と知覚過程が類似している (考察によっては「合致」する) のは、「系」としての要素間の相互作用そのものを「記号」全体あるいは「環境」全体だと規定している点にある。解釈が記号の解釈だとしているところも、知覚が環境の知覚だとしている点に一致する。また、パースの「解釈項 (Interpretant)」とギブソンの「不変項 (Invariant)」共に「項・定数 (-tant)」を用いる術語が当てられている点も面白い。なお、表中の各セル中央の表記で使用した語句は、生態言語学上の概念を当て嵌めた候補にすぎず、今後の議論によってはもっと適切な術語が当てられる可能性が高い。たとえば、言語要素として精確に (狭義に) 規定するのであれば、「表現」「世界」「意味」という汎用的な用語よりも「包囲記号配列 (ambient semiotic array)」「言語環境 (linguistic environment)」「言語義 (linguistic meaning)」を使用する方がよいのかもしれない。

い。いずれにしても、拙著でも繰り返し強調しているように、「要素」「範疇」と言ってもその境界線が厳密に引かれているのではない。パースもそれぞれが独立した存在であるとは一言も述べていない。むしろ、連続するものであるとして記号のダイナミックな在り方を謳っている（パース, 2001）。本稿においても極端な要素還元主義を忌避している（実存を議論しない）のは、それぞれの存在を絶対視すべきではないという姿勢があるからである。

表 2 (記号・言語・知覚) 系の全体像 (宇都宮, 2018, p.91:表 3.2 を抜粋・改編・再解釈したもの)

要素 範 疇	代表 表現 包囲配列	対象 世界 環境	解釈項 意味 不変項
第一性	性質 /こえ/ (時間的な表現) 一次元的包囲配列	図像 流れる (即応する) 言葉の世界 近接環境 (観察域・生存圏)	名辞 一項的 (単純な) 意味 静的不変項
第二性	個物 [かたまり] (物質的な表現) 二次元的包囲配列	指標 残る (蓄積する) 言葉の世界 周辺環境 (行動域・生活圏)	命題 二項的 (複合的な) 意味 平衡的不変項
第三性	法則 【かたり】 (空間的な表現) 多次元的包囲配列	象徴 行き交う (交流する) 言葉の世界 広域環境 (生息域・生命圏)	論証 多項的 (複雑な) 意味 動的な不変項

## 6. 意味が分かることの意味—結語に代えて

日本での生態学を牽引してきた佐々木正人は、その著書の中で次のように述べている。

言語の研究者がすべきことは、ギブソンが視覚の領域でしたこと、つまり言語にとって「環境」がどのようなものか、言語が獲得する「不変項」がどのようなものか、そして言語のために身体はどのようなシステムなのかを探究することだろう。言語の「環境」、「不変項」、「知覚システム」などが明らかにされれば、「エコロジカルな言語論」が成立するだろう。もしその試みが成功すれば、リアルなことばへのアプローチが開始されるはずだ。（佐々木, 2015, p.126）

本稿がその期待に応えているかどうかは分からないが、少なくとも、どこかで誰かが取り組み始めなければならぬ試みではあったのだろう。ただ、始めてみると面白いことに、言語も当時佐々木が考えていたような間接知覚なのではなく、直接知覚の体系であることが「見えて」きた。つまりは、ギブソンが行った方法と同じ方法が言語分析にも通用することが分かってきたのである。そして生態言語学は、オグデン・リチャーズではないが、『意味の意味』（オグデン・リチャーズ, 1967）をまた別の角度から解き明かすことができる可能性を広げようとしている。

ここまでの論考を展開させると、言語の意味はやはり言語自体（というものが存在するとしたら話だが）が獲得したものではないような、むしろ環境と有機体（主体）が相互に影響し

合って形成されてきた（人間）特有のシステムであるように感じる。生理学的に論じれば大脳あってこそそのシステムなのかもしれないが、言語、特に意味の問題は単純に中枢機構の働きを解明すれば十分というものではない。

- (15) a.河川の氾濫が発生しています。直ちに避難を開始してください。  
b.川の水があふれています。すぐに逃げてください。

(15a)と(15b)は、同義か異義か。意味はほぼ同じなのか、まったく違うのか。印象、分かりやすさ、利用のしやすさ、理解のされやすさ、あるいは誤解を与える程度はどうなのか。そうした価値や意義の差、適切性や妥当性の評価、誰がいつどこでどのように用いるべきなのか、誰がいつどこで接するものなのか、そして、そうした価値や意味をどのように知る・覚える・習得する・学習するのが私たち人間なのか、といった問題は、意味単体が確実に判明した（記述できた・理解できた・表現できた）としても、引き続き問題として残り続ける。残念ながら、意味を言語で記述しただけでは、「そういう意味です」以上の議論ができない。もちろん、生態言語学をもってしても上の課題解決にはほど遠い。しかしながら、生態言語学は意味の確定を最終目的とはしていない。反対に意味については、不確定・不確実なもの、揺れ動くもの、変化するもの、変容を遂げていくもの、その時々でその場に合った有機体が知覚するもの、とみなしている。だからこそ、環境と有機体との関係性がどうなっているのかを詳細に分析することから始め、「その時点での」「そうした関係性があるところでの」意味を解明していく。そうした分析を通して「知覚とは何か」を明らかにするのが、生態言語学だと言えるだろう。

言語の習得や学習は知覚の問題と一切関係ないとする姿勢が一般言語学には散見される。あるいは関係ありという立場であっても、（従来の語義を表した術語としての）「習得」を論じていくと必ず中枢の働きが強調され、（同上の）「学習」を論じていくと必ず刺激の働きが強調される。ところが、両者に共通する（介在する）事項が「入力」（あるいは出力）であるがために、入力自体の重要性や実存性がますます強化され、正論化されていく。皮肉なことに、入出力の重要性が説かれれば説かれるほど、環境および有機体の在り方や大切さが議論の対象から外されてしまう、少なくとも軽視されてしまう。それは、言語学的研究が他の分野——主として習得や学習を考えなくてはならない分野、特に教育学——にはほとんど貢献しないと宣言しているようなものである。一方、生態言語学が明らかにしようとしているのは、本稿での分析が示す通り意味を理解するという現象や事態がどういうものなのかという、いわば意味が分かることの意味である。当然ではあるが、その道りは険しく生態言語学であってもどこまで解明されるのかは分からない。しかしながら、環境と有機体双方が補い合っている（あるいは分断できない）と捉える姿勢は、従来の言語観・学習観を大きく揺るがすものである。他所（宇都宮, 2020）でも議論しているのだが、おそらく言語の「習得」と「学習」は完全に別個の機能あるいは発達過程なのではない。仮に中枢機構が（神羅万象の表現と理解に寄与する潜在性を備えた）言語的知覚を含むすべての知覚を制御しているのだとしても、その処理をどのようにしているのか、本当にそういう中央集権的な処理方法のみが有機体の採用（淘汰）してきた方法なのか、等が必ず問題点として浮かび上がる。ならばいつそのこと、自然の在り方を改めて見つめ直すことから再出発するのも、一つの考え方なのではないだろうか。

## 謝辞

本稿の上梓に際しては関連分野の査読者からたいへん有益なご指摘を賜った。この場にて改めて御礼申し上げたい。なお、論述が頑迷等であればもとよりすべて筆者の責任である。識者のご叱正を仰ぐ次第である。

## 注

- 1) ギブソンはこれを「アフォーダンス (affordance)」と命名した。後に生態学の重要な鍵概念になっていくが、後述する通りその定義や解釈をめぐるには非常に多くの説があり、現在では汎用的・日常的な用語として定着した感すらある。そのため、専門的には（厳密性が求められる場面においては）その使用が控えられる、あるいは別の（適用の範囲を狭めた）用語に換言される傾向が高くなっている（佐々木・三嶋, 2001）。
- 2) 本稿では、狭義研究分野の違いを考慮して「有機体」「生命体」「主体」「人間」等の用語を援用しているが、論考上異なった概念として定義しているのではない。生態学を基盤にすれば、すべてを抱合して取り扱うことができる。その意味において、「有機体」を最上位の概念として適用していくのが望ましいと考えている。

## 引用文献

- 宇都宮 裕章. (2018). 『生態学的言語論が語る学びの未来』. 風間書房.
- 宇都宮 裕章. (2020). 「言語言語への生態学的アプローチと目指すところ—ヴァンリア教育言語学からの検討」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第 52 号. pp.1-17.
- オグデン C.・リチャーズ R. (1967). 『意味の意味』(石橋幸太郎(訳)). 新泉社.
- ギブソン J.J. (1985). 『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』(古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻(訳)). サイエンス社.
- 佐々木 正人. (2015). 『新版アフォーダンス』. 岩波書店.
- 佐々木 正人・三嶋 博之(編). (2001) 『アフォーダンスの構想—知覚研究の生態心理学的デザイン』. 東京大学出版会.
- パース C.S. (2001). 『連続性の哲学』(伊藤邦武(編訳)). 岩波書店.